

ものゝゐたち所よりてかはるなり江戸の戸棚にいせの居風爐

〔百廿七〕 山田の客舎 附間の山

十日よ山田妙見町小倉屋甚右衛門てふ旅店よ宿るこの地の友人佳木
通稱山原来りていと深切もてあさる久老ぬしを訪に信州遊歴の留
七左衛門守よてあはず月仙老人は訪ふべかりしがこれも歸路のいそがるま
見へずしてやみぬされど人にことづけて書の事たのみつかはせり
榊田川よて

さしてゆく榊田の川邊一筋よれくれはせしなかみの都路

○十一日參宮 じけ入るやたけの都の竹の春

めうかあらせたま〜く來る神垣又富貴と申すもはかりのこと

○歸路のいそがるま〜よ二見あさまへはゆかずしてやみぬ

重箱のふた見のうらよ也かてかへるあつまの家そほた〜なりける

追書 け都の都
はたにあらはら
事これ考
いまだ考
へたらす
しあや
りま

○間の山よて

うたひめの手ふりあはれよひくいともか〜とき世々よあひの山本
間の山の片かげよあやしき小屋がけして木綿のふり袖もやうある
ものなと着てかははげるばかり又粧ひたる乞女三絃を鳴らし錢を乞
ふされどその三絃の曲節もいとさはがしきものよて今江戸の芝居よ
てする相の山の章歌よは似ず老婆は小屋の前よて草履を作りこれを
賣る人おほくは雪踏をゆるさず故に旅又七八歳の兒女はさ〜らをすり
て錢をもとむ右の尺ばかりの木よきざをつけこれをさ〜らにてする左
よあらざいとふつゝ舞ふにあらざあどるその外の乞女も手よ爪をもち
て往來の旅人につき日々の活計をなす者多〜間の山の乞兒木綿の袖
てはやすもの殿中ぢやはりひぢやといふてはやす殿
中の袖なし羽織のことなり是古語なるよ〜或人いへり

〔百廿八〕 古市の總評

古市にいづれも大樓なり。見せの暖簾二重にかけてあり。軒のつねののうれんの如く奥行一間の土間ありて。そのあがり口も又長暖簾をかける。見せの隅もちひさき曲突よから茶かま一ツかけてあり。是の茶店此名目なればあり。

○古市よて客あれば。家内此おやま残らず出て次第よくならぶ。大かた十五六人廿人ばかりあり。扱盃出て酒もりはしまれば。衆妓酒此相手となり。一人毎よ客よ盃をさす。そ乃二人三絃を鳴らし衆妓同音ようたふ。そ此内にて客の目にとまりし妓を定むれば。その妓つとたちて客の傍よ居る。衆妓の猶席よありて興を添ふ。このうち追々客あれば妓五六人わかれて。そ此客をもてなす。閨房に入る乃時にいたりて衆妓はしめて散す。それまではほしいまよ。食り食ふてあそぶあり。

○古市もいまの伊勢れんど大におとろへて。大坂歌或は江戸此ゆりや

す潮來ぶまよ似て非あるもひをうたふ。佳木てふおとこ聲たへよおんをうたひ聞せたり。妓はかへりてこれよおよはず。妓もいせひようた乃一トおどりといふことをうたへどおんどよのあらず。音頭のみぞ長くこの地にあらまほしけれ。その餘の歌のかくもがなとぞおもはる。

○妓の京大坂より野鄙なり。髪シヅメも髻マユもみぢかく。四方丸シヅメ。圖シヅメの前よ島田の鬘シヅメのうしろと髻シヅメと引付くあり。前髪シヅメの京風の如くきりて前へたてる。衣服の絞り縮緬の單物。或は縮緬の帷子。帯シヅメの蒲縷子ねづみ縷子等なり。中々祇園島の内などに及ばず。繩手坂町の妓よ對すべし。

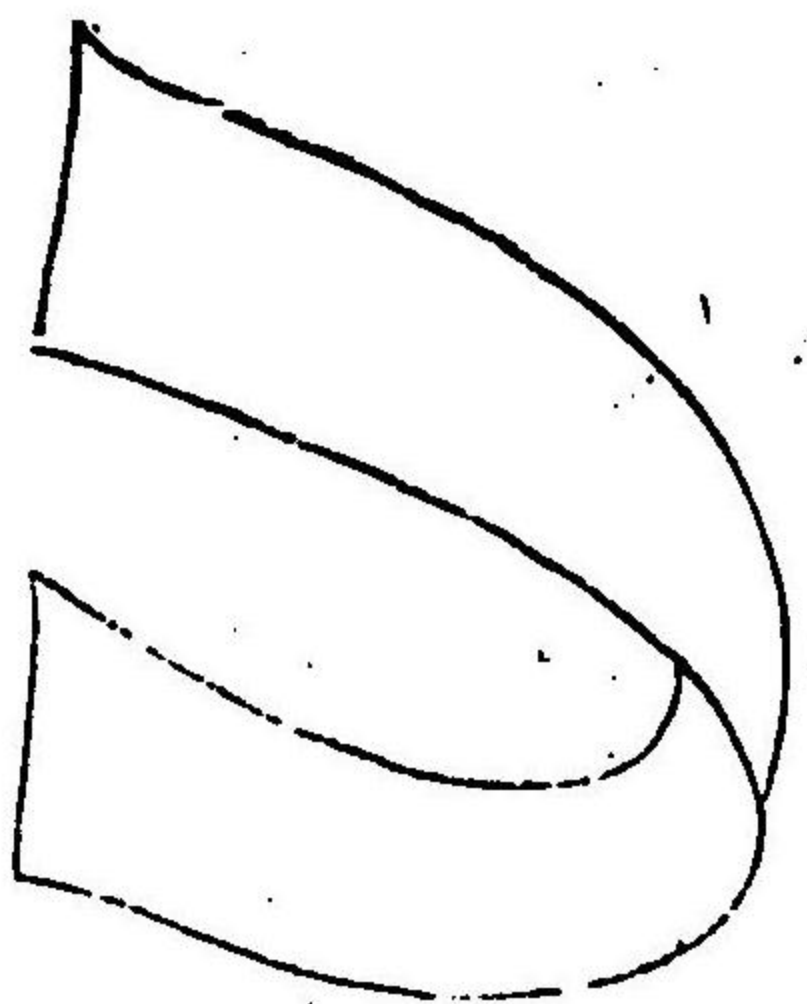
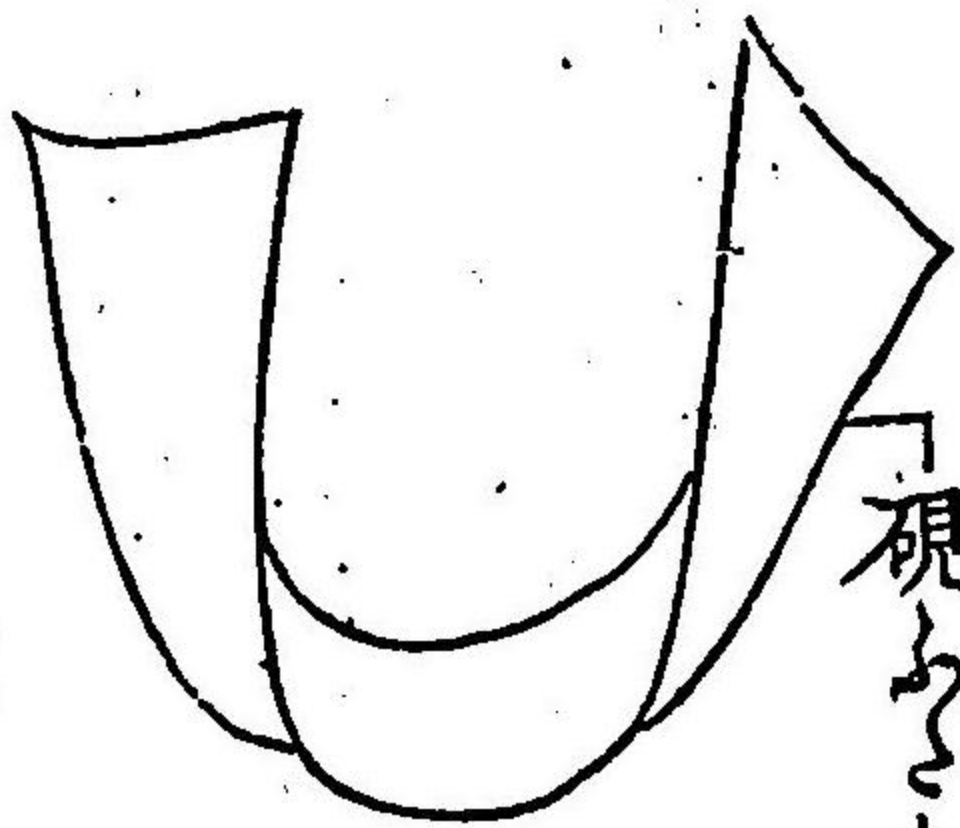
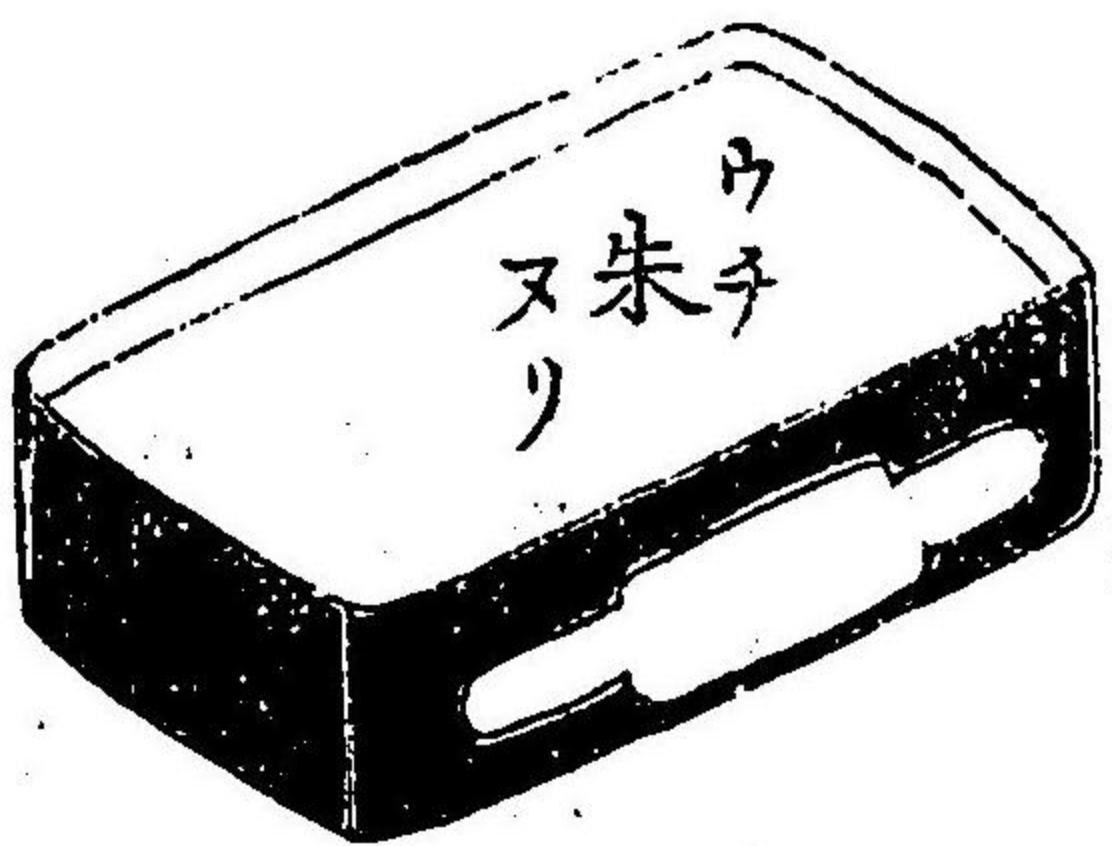
○言語の京談に似ていせ訛りなり。

「やけるといふ世話にいふ。やきもち也。よえるわいなんし。來たを來たのんし。下されと云を。ちやちやもつて來てくだん。そこたてくくだん。などいふ。くだんせといふべきと。せの字シヅメの言中よふくみていふゆゑ。くだんとい

ふがごとし。そべて京大坂いせの女子ハ茶を必ず茶々どかさねていふつねのとなり。

○古市よて地並といふハ。一夕方金一顆なり。旅人ハ廿四匁。是金壹分貳いせよはがきといふものあり。則紙札あり。壹匁札六十四枚を以て小判壹兩よ換ふ。ゆゑに六十四匁にて壹兩なり。名古屋ハこれを米札といふ。夜食ハ床に入りて後夜半頃よ出だす。菓子ハ坐付よ出すなり。地並ハ席て燭臺あり。その外の食物等萬事略せり。

○古市。松坂。四日市。桑名までの妓樓の硯ぶたいづれも圖の如し。飯鉢の臺の長きが如し。



硯ぶたいのちまみと必す杉のへぎた

○初會此客も後朝にハ了^{コメ}髮時繪の文箱をもち來り客に呈す。文ハのり入に櫻などいろずりよえたるたてふみなり。京大坂とも妓の文ハ尋常此半切なるよ。伊勢ばかり古風のこりて豎文なるもをかし。扱客逗留すれば了髮始終付そひ居て必樓上よいざなふもしゆかされば妓みづから迎ひよ來る。その手段いとまめやかなり。

○伊勢乃妓樓とかるべきも乃第一古市第二松坂第三イシデン一身田第四日市第五津第六神戸第七桑名なり。この内桑名の少しれとれり。桑名此美濃屋といふ樓少しく趣あり。凡此七ヶ所乃妓つねに交代す。年中その月によりてその地は盛衰あり。故に時々交代して久しく一所に居ず。吉田崎又此内よりて此七ヶ所乃妓その趣みな相似たり。

〔百廿九〕 古市芝居乃噂 附一身田及堤世古此噂

古市は芝居二軒あり。春と秋興行す。近年春一度興行すといふ。一身田も至極繁昌ある地にてこゝにも芝居あり。八月初旬大坂より片岡仁左衛門などくだりて芝居ありといへり。

○古市乃外山田は賤妓あり。夜はうけ行燈をともし甚だにぎはへり

○山田にては横町を世古といふ。今も大世古堤世古などいふ名目あり。

○津より山田まで九里乃間。食物悉く鹿菜なり。宮川乃あなな堤世古乃松

坂屋三右衛門てふ酒店の料理すこしくよ。ゆゑは店上客たゆるとあし。松坂より雲出の邊吹矢からくりある店多し。明星のところてん夏月の湯製のものなし。此心太湯製を以て珍重す

〔百三十一〕 大平が噂

八月十二日松坂の大平を訪ふ。通稱本居三右衛門。この大平は元豆腐屋なりしが國學にこゝろをよせ。宣長翁の弟子となりてその志厚かりしが。宣長養子としたり。宣長の跡といふは此大平のみありといふ。年四十ばかりにゆ。至極人品よき人あり

さやけさの一夜は千夜の秋の月ひとよ。千夜の影やこもれる大平女郎花さく野の露にわけぬれて戀する人の神とかこたん。大平このうたを書てれくらる。迹の歌よろしく聞ゆ

〔百卅一〕 坂和田喜六が墨跡

松坂の長井元申を醫師にて書をよくす。名は摺字は申之一申と號す。と

追書
この書後
よ古筆
定よ佐川
田昌俊よ

あらず 龍安寺偏 易和尚默 々これな り京の大 倉好齋の 監定よも 江戸の古 筆隠居了 意しよも せし如く 右の如く 桂窓の如 たり此書 松坂人長 井嘉左衛 門の珍術 なるが右 たるが右 の珍定よ 疵とあり のいふり 又これい 人のな同

かく申好きの人なり。この人好古の癖ありて。多く古書畫を愛す。所藏に 坂和田喜六が唐紙一枚にしるしたる三行ものあり。

正成相尾付字家お持 ^歳 _{セキ} 相カ

のそ又為茂塘築平位殿 ^{テウクタルヲ} _{メクラス}

隸字 黙ニ翁

嘯月 _{印ゴノ 大サ}

野 _{下目シ}

手迹ハ大師様の如くみゆ。黙々翁ハ喜六が表號なり

〔百卅二〕 道のへの横

松坂の殿村三五平ハ蕉門の杉風ウ後なりといふことハよはせを墨迹多

しりの内よ

道のへの横ハ馬にくハれけり

はせを

件のかけものあり。諸集ハ道端とあり。道のへの先接にて後よ道端と一

直せしものか

又同人所藏のかげ物よ。許六が俳諧三聖の圖よ。えせをの賛あり。三聖ハ

宗鑑前書長文よ。てあり。以上長井予蹄路をいそぎし故一見せずしてや

みぬ。

追考。後よ聞くに殿村氏ハ杉風が子孫よあらず。二三代己前の主人俳 諧を好みしかば。はせを以下の墨跡を藏棄せけれど。今ハあらずとす。

追書 當時ハ予 當時ハ殿 村主人と 面識ナラ ざりし折 あり

かゝれば傳聞乃あやまり知るべし

〔百卅三〕 其角が自画賛の評

長井元申所藏其角が自画賛あり唐紙横もの



晋子 双書
薯子

かくのとし發句の書へかけて書付たり其角の名ハ薯子といひしにや。按するに薯ハいもなり其角書ハ下手なればみづから芋と卑下せしなるべし。今も下手をいもといふとあり元祿以前の洒落なるべし

〔百卅四〕 伊勢の好事家 附人物の評

勢州追分内日泉村^{ヒナガ}。岩清水龜六といふ人あり。こゝに謝肇淵が唐紙一枚又書し三行ものあるよし聞ぬれば。歸路よ龜六を訪ふよ留守にて見えす。龜六も頗好事あり。

○四日市に伊達源三郎といふ人あり。至極の好事家なり。その弟馬曹も詩作俳諧など嗜めり。八月三日兩子を訪ふに馬曹ハ當春没し。伊達の留守よてあらず。

○津も伊豫町八幡邊よ訪ふべき人あまたありしが。歸路の急がるゝまよ訪はず。凡遊歴の客の道をいうぐハ。槌を以て箱を洗ふ如く。空しく

手足を費して詮なきとぞおほかる。

○三州吉田の濱名屋勘七のみづから扇亭と號す。所藏の扇面數千本あり。これを一覽するよ一日よして猶盡さず。

○伊勢よて人物の。本居宣長。韓天壽。田必器。月仙。久老なり。此内久老のりの名いまだ發せず。宣長の伊勢のみ又限らず實に大家なり。宣長當春の物故す。かれどもみな古人となりぬ。今残るもの月仙と久老のみ。

〔百卅五〕 筆捨山

去る八日に大津より乗船して矢走よ着きぬ。おれどもむなしく船底よ潜り居て。湖水を賞するよよじなり。九日の朝鈴鹿山を過て坂の下よ出る。山中に狩野古法眼が筆捨山といふあり。山の高からず石山よて小松生まげれり。武州金澤にも狩野の筆捨松といふあり。又紀州よも同名の松あり。いにしへの畫家もいと拙かりしにや。うつしかたきといふ山

にもあらずか。後人山水よ名をまふけることすてられて山よもなかくかふてつむし。

〔百卅六〕 桑名の秋雨

八月十三日津をたちて。未明よ上野へ過る。

狂句 秋の雲鷹よ上野か朝ほらけ

今夕桑名よ泊る。ますけ 丹羽善九 長成 米屋 右衛門 佐介 などのいふ人いと深切よもてなさる。十四日雨ふりて船出ざりければ逗留。遊歴中古書をとたづぬるよてつ。の山形屋といふ書肆に元祿巳前の草紙類にすこしくおかしきものありしゆゑもとめ得たりしかの地よ兩三日も逗留せば珍書も得べきをわづか一日にして出立しけるまゝ。伊勢路の松坂。津山田邊。廿はくさぐりもとむるよ及ばず。遺恨甚し。伊勢路の松坂。津山田邊。廿年來の豊作といふ。但川付の田地の少しく水損あれど是ハ僅なり。八月六日の風雨よ早稲を倒しぬ。これも愁ふべきよあらずといふ。只神戸領桑名領町家川邊大水。田地悉く變じて河原とみれり。

〔百卅七〕 桑名の歌曲

桑名邊よて大坂のゆりやすをうたふまかれども風調少しく異なり。又さゝものといふものあり。これハ歌淨瑠璃あり。此さゝものにあれ鼠田にし。などいふ章歌あり。

〔百卅八〕 桑名市中の喪

桑名よて喪ある家ハ軒にむしろをかける。江戸よて簾をかけることし。大店の薙二枚。小店ハ一枚あり。則暖簾をさけたる如くす。土人の云。この事 天武天皇行幸の時の遺風ありと。

〔百卅九〕 一目蓮

桑名より三里ばかり西北に多度といふ所あり。多度大神宮たゝせたまふ。相殿より一目蓮といふ神あり。ます。宮殿より翠簾のみあり。神体の太刀一ふりと幣のみありといふ。この神甚奇瑞をあらはと。折々遊行

一目蓮ハ
天目一箇
命又天
麻比止都
補命、天
津比古禰
の御子な

し給ふことありとて。里人専ら信心す。多度太神宮は桑名より乾の方三里許にあり。祭る神ハ天津比古禰命あり。

〔百四十〕 佐屋廻り

十五日も雨ふりて宮へ舟出ず。せひあく小舟よ棹さゝせて佐屋へ廻る。

朝貌や今朝ハ見てたつ雨の宿 馬琴

待宵もよかるゝ今朝となりよけり 工十

腹は飢^{ニクナ}のしみる秋寒 馬琴

暮るゝまて朝かほ見せよ秋の雨 工十

杖やすませてくれ竹の春 馬琴

桑名の俳諧師はあゝなべて美濃風と稱す。しかれども支考が風調にもあらず。田舎の俳諧ハ頑^{カクシ}よて佛者の他宗をまじへざる如し。この日架橋といふ人。船よて佐屋まで送れり。船中の吟。

すゝむ杖もひかしよ曠やけふの月

やたてようけることの葉の露

架橋
馬琴

○佐屋本陣所望の短冊

宮舟のきれものしやとてつかの間もさやへまはればあふなけ
なし

〔百四十一〕名古屋の十五夜

十五日の雨ふりぬ。十六日名古屋三藏樓よて

名月や蛭虫ウツムシあく艸まくら

おやと子かささらに百里を隔居てひとつ月見る芋の名月

〔百四十二〕藤川の夜行

八月十七日藤川より赤阪え過るよ。日くれて並木の虫の音いとおもし
ろし。月の出る頃あから空はくもりて道更よくらし。

かけくらき月も並木の松むーにいそく驛路の鈴虫の聲

〔百四十三〕はせをの發句塚

藤川の驛西より入口南のかたよ。今年新よはせをの發句塚を立たり

こゝも三河むらさき麥のかきつはた はせを

東海道京までのうち驛の街頭にはせをの發句塚あるハ。こゝと興津の

みなり。又杖つき坂
よもあり

〔百四十四〕からころも

橘洲老人。七月十八日よ身まかりしよ。名古屋にて聞きぬ

からころもまであつ旅の夜ななみだ

〔百四十五〕かもうり

山城より伊勢遠江邊の冬瓜かかたちほそなかく  かくの如し
丸きもあれどまれなり。かたち甚だ大ならず。どうなすといふもの箱根

唐衣橘洲
の助と稱
之助と稱
し醉竹庵
と号す小
安府の田
十人なり
しといふ

より西になし。みな東捕塞カボチヤなり。味ひ尤淡薄にしてくらひがたし。京よて
わかばちやをゆで。青のりをふりかけて酒の口とりあどよ出だす。いよ
くくらふべからず。

〔百四十六〕 濱松の夜雨

八月十八日濱松よ宿す。この夜雨いたくふりぬ。明日大井川越んとおぼ
つかたし。

ふり流す雨にも物を思ふかな大井川原に水やまさと

〔百四十七〕 東海道の噂

東海道小田原までの人。氣家造り等悉く江戸をまなぶ。刻たばこをど
る店ハ江戸の如く障子にたばこの葉を書けり。箱根を越て風俗少く
かたれども猶江戸にちかし。遠州路までは女の髪カミの風も江戸をまなび。
言語も一風ありといへども東國訛りなり。今切の渡しを隔て三河路へ

入れバ大よ一變す。たばこの看板杯京地の如く一たはとかやうの

木札をさげおく。尾州に至りて又一變す。宮七里の海上を隔て又復一變
す。大坂より西のいまだ見す。江戸より東北猶いかならんかし。京より伊
燧石ヒシハその色大に黒し。水戸より出る石のことく潔白なるも。勢までの
のさらになし。京の婦女江戸の燧石を見れば大よあやしむ。

〔百四十八〕 薩陀山

八月廿日興津に宿す。き島よりはた打邊まで一里の松原を過るよ。
三保が崎を行よ見てゆく。驛よ入りぬ。

このあたりもみちめつら。沖津鯛

同廿一日未明。薩陀山を越るよ。雨少しふりて風景を損す。や、明わた
りて少く雲のきれたる方を見れば富士の裾半ばあらわれ出たるも
うれ。道のほとり夫婦とおぼしき順禮ぶす。とこいといひあから跡
より來れり

摺鉢の不二からさつた山の神夫婦喧嘩のあしひすり小木

〔百四十九〕 大井川

去ぬる十九日の夕かた大井川を越たりしに十五日の雨も川もばらつくつゝへてきのふ十八日に渡りはじめけるといふ。この日も折々雨ふりければ水高く流れけはしく川ごしの乳のあたりまでひたしぬ。過し五月廿二日よこの川を越たりし日もかくのことし。あたへ川ごしひとりに九十四文のそくなりけり。連臺てふもののにのり。かつがれながらこゆるに。めくるめきていとこゝろくるうりき

大井川これそ地獄のさかひぬも錢のあみだの連臺てこす

〔百五十〕 喜瀬川の大水

去る十五日雨いたくふりて。次の朝五ツ半頃駿豆の堺ある喜瀬川の橋をがれたり。この橋は過し六月廿九日の大水もながれ。七月十八日には

しめて假橋のわたり初せし。八月十六日の朝水俄も漲り出てかの假橋をぬし流し。水に向ふの竹藪をえらへりと茶店の老翁ものがたれり。予ハ廿一日にこゝよ來ぬるに川幅わづか廿間も足らぬ川を連臺よてこしぬ。かゝるふとひいとめづらしきとなり。三島の東新町川の橋箱根三枚橋その外みな同時よ落て五七日百姓もたゝあり。悉く連臺としなり。十五日よ予桑名よありしが。桑名名古屋の間川々の何のさゝはりなきて越たり。わづか四五十里を隔て天地風雨の變化かくのごとし

〔百五十一〕 箱根東福寺の釜

八月廿二日はこね山を越ゆ。この日三島をたちて大磯に至る山路をかけて十二里の道なり。箱根權現へ詣んと道よりかけぬけたる。社までハ程遠くて。供の人足よおくれんとの心うければ。二の鳥居より遙拜す。一の鳥居の左りの方よ釜二ツあり。文永五年に造る所よして東福寺浴

室の釜あり別當法橋位隆實とあり。一ツの釜よハ年號なし銘は釜のふちよ鑄付たり。あはたゞしきまゝ、ようつゝ來らず

〔百五十二〕 さいの河原の懷舊

さいの河原よて

はこね山やまにもさいの川太郎そのいたゞきのさらゝ水うみ心のとゞまりぬるものい、さいの河原五體の地藏堂あり。このかみのふたりのむすめせい、つた、又三歳にて世を早ふせられし兄吉次郎、荒之助の事など何とあゝ思ひ出られて。あはしたゞみおれば、おさなきもの、來りて、權現に案内申さんそくたべといとかしましくいふよぞ。錢五六文あげあたふれば、むらがりてひろひゆくもよくからずあはれよ



かしかりしか

〔百五十三〕 平越たつとろの富士

五月西遊の日、連日雨天よて一日もこの山を見ず。八月歸路に到りて、駿州岩瀬より原より原のあひだ、終に全形の不二を見ざるをうらみとす。廿二日はこねを越るの朝一のやまのたひらよりさいの河原まで三里ばかりの間、不二を左りに見て登る。この日快晴、只山腰より一帯の白雲ありて、畫る如くまかり。山上に旭日映して、高興言外、暫時行客の足をどめたり

〔百五十四〕 名馬の足跡 此條雨談に出たれバ省く

〔百五十五〕 大磯の戯咲歌

五月十日大磯よ宿せり。八月廿二日歸路よいたりて又こゝに宿す。大磯や虎が雨ふる頃よ來て鳴たつ澤の秋よかへれり

嶺姑峯一山
 平越眺望之
 不二山真景
 八合目何と
 八合目何と
 八合目何と



不二の
 風光
 あり
 あり
 あり

山雨晴如
 拭
 人且駐
 節
 新秋天一
 碧
 洗出白芙蓉
 夢

坦庵
 画



山花
 生
 高
 画

〔百五十六〕 遊行忌の群集

八月廿三日大磯をたちて河崎に泊る。今日藤澤遊行寺開山忌にて遠近の村夫村婦參詣おびたし。寺内は角力あるよーいひーが晝より雨ふり出しければ、參詣の老若みあぬれながら家にかへる

遊行忌やこのゆふべよりちる柳

〔百五十七〕 歸庵の祝章

廿三日川崎より旅寝するよ。家路もすてよ。遠からねば。さすがよ秋の夜のあくるをまらわびたり

さみーさや江戸よ隣て秋一夜

あくれバ廿四日はやく江戸よ入りぬ。家居すてよ。ちかづけば。四たりの子どもら袖よとりつき門よとしり出てよろこびあへり。凡百餘日の旅行。家内のも一日も病ず。予もまた旅中いよくすこやかなり。

翁の會田氏を娶とりて一男三女ありき長女名はさき此時九才次

女いふ七才男五郎後名を興繼宗伯と稱す五歳季女くわ三才季女ハ即ち幹等が生母あり

風もひかすむーけもあくて田舎より江戸へみいりの秋そめてたき右五月九日江戸を立て。八月廿四日江戸よ歸る。日數百有五日遊歴の國。武藏。相摸。伊豆。駿河。遠江。三河。尾張。伊勢。近江。山城。河内。攝津。都合十二ヶ國也

享和二壬戌年八月廿四日筆同十一月朔日校合畢

曲亭 瀧澤解麟記

附録

- 一 旅にてよくむべきもの
- 食りてあらことまらぬ舟人
- ひとり旅と聞てけしきばむ宿引
- 名所を過る日の風雨
- 一 旅よてこゝろうべき事

○ 錢をみてもつから川をりたす事

川越の賃錢甚高料といへども、是は病者の藥禮とあなじことたるべし、病愈て藥代をつくのふは、無益のこととく思ふ人欲の常なれど命を全ふせしをおもへば、金錢も何かおしむべき、川越の賃も又うくのごとし、只命をつりがへのちん錢とれもひて、をいむとあかるべし、ちかごろはこねの三枚ばしよてわづら十六文の錢を惜みて、ある武家の供足輕忽命をうしなひけるよし、はこね山中の人かたれり、この八月十八九日の事のよし

○ 川留よ退屈して密よ留、川を越ゆるべからず

○ 近みちをはかりて猥よ船よ乗るべからず

これの陸地にて往來あるべきを、欲にまよひ海上ひちか道をはしり難風よあふて一命を失ふ人往々あり、旅中尤もつゝいむべきあり

○ 速なき旅の夜をおかして早く出立べからず

朝の早く出て夕のはやくとまるべし、朝早ければ道もはかのゆくものなり

○ 水とのむべからず、菌すべて珍らしき食物を食ふべからず

○ 旅中の悉く歎地とこゝろへ少しも油断すべからず

おもてに勇氣を見せて、うちな柔和たるべし、夜のすべての物をまゆやかよどりしらべ枕元よよせおくべし、いかよすゝむるともめしもりをかうべからず第一怠慢を生じ、第二瘡毒のおそれあり、怠慢を生ずれば、路用をどうせる事ありつゝしむべし

○ あゝき草鞋のはやくぬぎかゆべし

わらじの價をおしませず、いぶんよきわらじをそくべし、草鞋の旅人の甲胃也、わらじあしく足いたれば、明日一步もそくびかた

○ 晝の食事ハ一二杯づゝ食ひ、空腹にならばいく度も少しづゝ食ふべし、大食をすれば道をゆきかたし。

○小休の時、オンアトミツハカ〜ト三べんづ、唱へてその席をたつべし。かくすれば物をわすれず

まかれども宿問屋こみ合、人足ハ荷をかつぎてかけ出すにおくれじど、こゝろあつてたるときハ、そのオンアトミツハカさへわするゝものなり予も百日の旅中よきせる二本手拭一すぢ笠一かいをうしあひぬ、道ハひたすら早うらんとをれもえず、たゞこれたらしとゆくべしかくすればおのづからはやし

○夏の旅ハ馬に乗べからず

夏の馬ハ蠅にくるまむもまおのづからあらし。乗人も必睡眠をもよふすものなり、故よ夏馬よのれば落る人多し

○草臥て馬よ乗るハ大ある損あり。馬よも駕よも朝のうち乗べし。朝ハ價も安し。晝より後泊りの驛程ちかければ、足のはこびもおのづからはかどりてす、むものあり。まかれども朝のうち足をやすま

せおかされば、草臥格別よりてよく日もの、用にたちかたし。出立より五六日めよしてせじめてあしのさたまるものぞかし。馬につれバ疝氣を生ず、これ乗馬と異にして鞍上不穩ゆるなり

この記世には、かかるべきすぢあきよしもあらねばひめて窓外に出すことゑし。ざるを近曾書肆何がしが強て請よよりて、この内數條を抜萃して三冊とし、簑笠雨談と名づけて刊行す。己下ハあは人の見る事を許さず。後もまたかくてあるべし。わが子ども等、扱せんと乞ふものありとも許すことなれ

正幹曰、このわが翁の遊歴の道すがら、かりそめよ物せられたる筆記もて、もとより鶏肋のやうあきたぐひなれど、それが中よハ、當時風俗の美惡、人物の批評など、何くれとあつかいつけたれば、世は憚ることありとて、板行をば許さざりし。翁の用心もまたたふとむべし。まかハあ

れど物換り時移り。文明の御代よしあれば今はた憚るべきことに
あらざるべし。かくて文字を校訂し。世よも示さばやと思ふ折しも。書
肆畏三堂のあるじ。ことを梓あざみにせんと乞ふよまかせ。やがて三卷さんまきの冊子
どいなしぬ。さればとて。かくはかなき筆のすさひを。世にものくし
うせんとにわらず。たゞ予が姻族のものにわかち。翁を慕たもへる人に
も見せんとの心しらひよりせしことなれば。翁の素志にたがへりあ
と。世の誦よみを得ることあるも。そひいさゝか辞せざるところあり。

羈旅漫錄卷の下終

男子家おとこに在ては未見の書籍を閲んことをおもひ。旅に
ありては未見の山川に遊んことをおもふ。志のれども
兩ながらなれことか。寛政庚申。予三十四歳。九月中
浣。豆相の間まめあひに遊歴うごし。九月十日きつじふにち。先づ武州金澤かねざわに遊覧うごらんし。
浦賀の友を訪ふて。豆州下田まめしうかに渉わたる。相摸灘あひも三十餘里。一
日難風なんふうにありて。船岬ふねさきよりゆる。九月下旬きつしげより。下
田の湊みなとに遊ふこと十日許ばかり。歸路連臺寺きりだいの温泉おんせんに浴あむ。天
城六里の山中あまがに越え。天城山六里あまが。修善寺しゆぜんじに旅たびす。三島
沼津の友人を訪ふて。相州厚木あつぎより。杖つゑを繪島鎌倉えしま
より曳ひて。初冬十五日家うちに歸る。往來百餘里。始終獨行ひとりす。半
たのしきことあれを半苦なかしめり。當時おもへらく。近年

家事まはしく繁多。旅行ふたゝびはありがたしと。志ありて今茲ふたゝび西に遊ぶ。文事よ百日の得阿れを俗事よ一年の損あり。を命や時とふたつあがら得を。かさねて眞の行脚成なすべし。古人詩ありこゝよ證とす。

人生宇宙間志願當何如。不行萬里路。即讀萬卷書。

享和二年壬戌冬十一月二日

著作堂馬琴再識

明治十六年三月八日出版
 同十八年五月二十日出版
 同十九年五月二十日出版
 同二十年七月十日出版
 (別製本讓受及添題御届)

(定價金九拾五錢)

著者

故人 曲亭馬琴

校訂者

東京府平民 外孫 渥美正幹
 四谷區尾張町八番地

著者相續人

同 府平民 瀧澤次
 麴町區飯田町二丁目三十二番地

版權受并

同 府平民 須原鐵二
 日本橋區西河岸町十二番地

製本及

金泉堂 鈴木次郎
 日本橋區通壹丁目一番地

印刷

常磐木活版所
 日本橋區本石町一丁目



新刻出版之廣告

任天田島象二著

一 貴女 大全女用文姫鏡

半紙摺美製全二冊 精彫圖畫彩色入

定價 金壹圓 正價 金六十錢 郵稅 金廿八錢

此書ハ上卷ハ兩皇后の宮の御尊影を掲げ奉り次ハ婦人品位の繪畫名所圖畫三
十六烈女圖傳白ハ一首女體式を始めとして教育編化粧の巻歌學裁縫學句も
女學女紅ハ關係ある者ハ漏さず之を網羅し其件數白ハ達し且つ悉く之ハ繪畫
と挿入し下卷ハ新體の女用文并ハ熟語を毎文章の末段ハ填め以て作文ハ容
易ならしめ體裁ハ貴女諸卿ハ坐右ハ於て日用欠く可らざる近世無双の女子寶
育兒法まで掲げたハ實ハ數百冊の女學女紅書ハ兼有する近世無双の女子寶
典として實ハ日本女鏡ハ背かざる良書なり冀くハ購讀して廣告文の誣言ハ
らざるを知り給へ且つ愛讀諸君の便と圖リ豫約低價法ハ做ひ非常の廉價
を以て二十年五月十五日迄二千五百部を限り廣く發賣せんとす尤も御購求の
多少を論せず出版せしものゝ御送金の順序を以て御送本可仕候

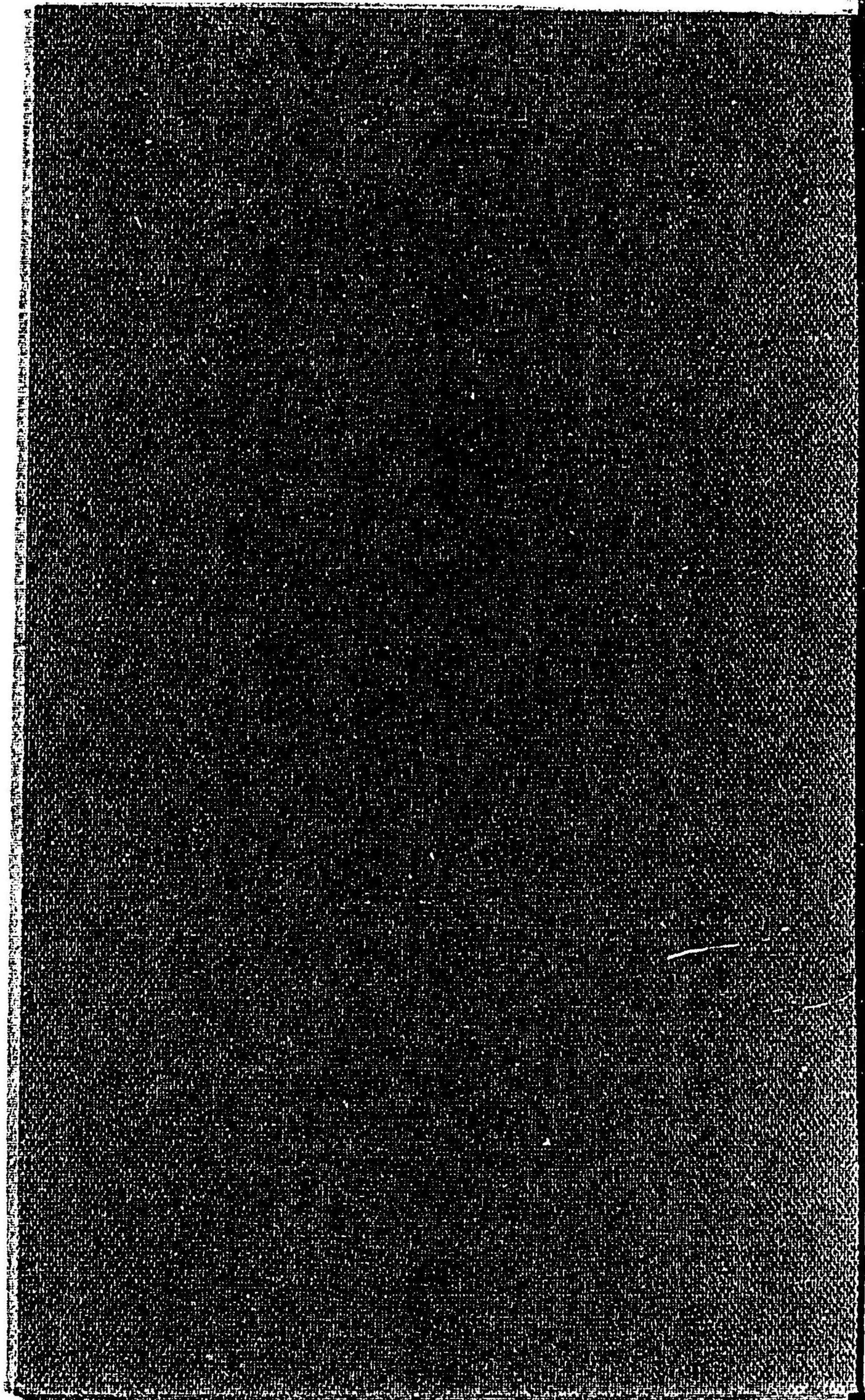
山東京傳先生戯作

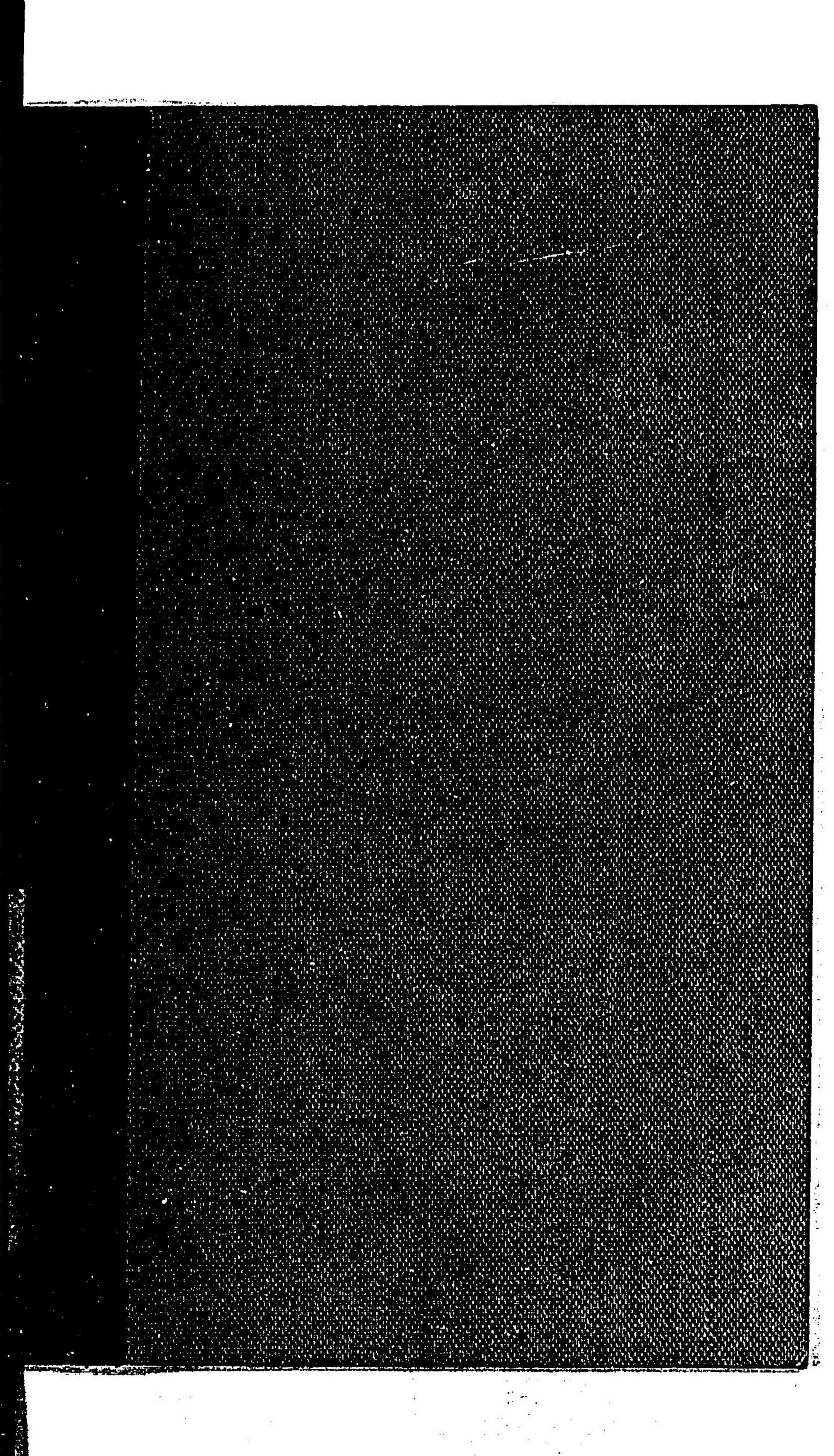
一 四書 京傳餘師

○大樂 ○通用 ○豊後 ○申

全二冊郵稅共 金拾六錢

此四書ハ孔子を格子とし曰く有名の京傳餘師火の玉を喰ハ皿までも洒落三味
の大樂通用世の通客若し花柳の大聖人とならんと欲せば先づ此床に入るの門
より始め給へ面白き戯作として風流雅君社會ハ欠くべからざるの珍書也坐右
一本と愛備せられん事を





915.5
Ta624k

095928-000-9

915.5-Ta624k

羈旅漫錄 (壬戌) 一名, 馬琴道中記

滝沢 馬琴 / 著

M20

DBR-0161



